

# “但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

## 第 22 回「肉用牛としての但馬牛改良の足跡」(3)

1991 年、“バブル”といわれた好景気が終わると、枝肉価格は急激に下がりました。そして景気に左右されない枝肉重量は、肥育経営の安定に欠かせない要素としてクローズアップされるようになりました。

それを反映してか、1996 年頃から家畜改良事業団の「北国 7 の 8」という種雄牛が全国的に注目され始めました。この牛は F 1 用に使われていましたが、「乳牛より大きな子が生まれ、肉質も素晴らしい」という評判で、全国の市場で子牛が増えました。次いで注目を集めたのが「平茂勝」です。従来の常識を覆すほど枝肉重量が大きく、サシの入りも最高クラスでした。このほかに「安平」、「飛驒白清」、「安福 165 の 9」など枝肉重量、脂肪交雑ともに優れた種雄牛が台頭し、黒毛和種は大型化時代を迎えました。

また、この頃から肥育経営の大規模化が進み、発育が良く、群管理に適応する子牛が求められるようになりました。これらの種雄牛の産子は、こうした肥育経営の需要にも合い、子牛価格は回復していきました。

一方、但馬牛はというと、こうした時代変化に対応できませんでした。加えて、当時のエース種雄牛は「谷福土井」と「照長土井」でしたが、増体型の「谷福土井」に遺伝病があることが判り、交配を制限せざるを得なくなりました。そんなこともあって、兵庫県の子牛価格はさらに下がり続け、1998 年度には“全国平均並み”にまで落ちてしまいました。

その頃出会った農家から、「牛の相場は千日相場。高い時もある、安い時もある。しかし但馬牛が和牛の基として日本中から高く評価してくれるから頑張って来れた。だが、但馬牛が他所の牛より安くなったのは耐えられない。」といわれた言葉が今も心に残ります。

こうした状況から、「但馬牛の閉鎖育種を見直すべきではないか」という意見が出てきました。そして、県下の繁殖・肥育農家、家畜商、食肉業界、更には当時の谷洋一・農林水産大臣や貝原俊民・兵庫県知事をも巻き込む大議論に発展しました。

その詳細は『続・但馬牛物語』に書かれていますので省略しますが、「閉鎖育種を続けるべき」とする意見が大勢を占めました。しかし、新たに種雄牛を造るには 6 年以上の年月を要し、直面する課題解決には間に合いません。そのため、「後代を残すには但馬牛を使い、販売子牛用には県外の精液を使ってはどうか」とか、「県外で活躍している但馬牛の精液を使ってはどうか」という意見も出ました。

谷大臣は農林水産省家畜生産課に、全国的な見地から識者の意見を聴き、検討させました。その結果も「但馬牛は黒毛和種の遺伝資源として欠かせず、閉鎖育種を継続すべき」でした。担当当時から親しかった肉牛班長に「何とか頑張れ」とハッパを掛けられましたが、具体的な解決策が見つからず前途多難でした。

しかし、「家貧しゅうして孝子現る」とはよく言ったものです。この絶体絶命のピンチを「菊俊土井」、「福芳土井」、「鶴丸土井」が救ってくれました。

「菊俊土井」は、間接検定成績が振るわず基幹種雄牛に選抜すべきか迷いましたが、同期で好成績だった「菊井土井」が淡路産なので、「菊安土井」の子が欲しいという美方郡用に残しました。

「福芳土井」は、購買の時に但馬牛らしくない牛を選んだと、叱られた思い出があります。また、一年先輩の「第 1 光福土井」の受胎性が悪かったので、繰り上げて間接検定を行い、デビューが早くなった珍しい経緯があります。

そして「鶴丸土井」は同期の「照長土井」の陰に隠れ、現役時代には殆ど利用されず、凍結精液が残っていました。但馬牛の守り神がいるのではないかと思えるような不思議さを感じます。

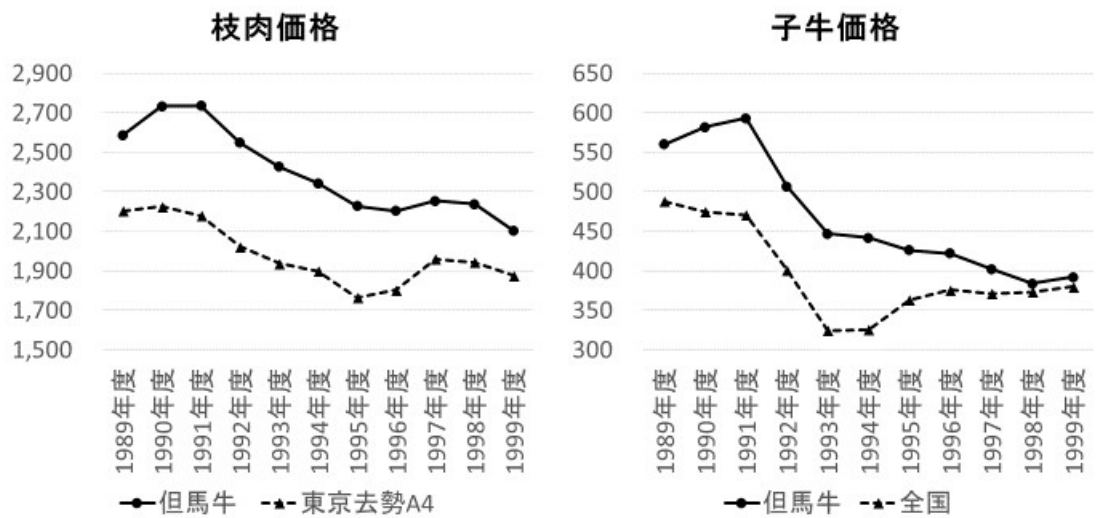


図1 肉用牛価格の推移